飯能市立博物館
Hanno Municipal Museum

ロウでできた羽衣をもつ
ハゴロモという昆虫

飯能市立博物館 学芸職員 本橋 綾香

初夏から夏の盛りにかけて、林の植物の上に、綿毛のような不思議な虫がよく見つかるようになりました。上から見ると直径 7 ㎜ほどの白い毛が落ちているようにしか見えませんが（写真 1)、触れるとピョーンと勢いよく跳ね上がり、横から見ると脚があり昆虫の姿をしていることがわかります。（写真 2）

(1) アミガサハゴロモの幼虫

（2）アミガサハゴロモの幼虫

これは、アミガサハゴロモという、カメムシ目ハゴロモ科の昆虫が幼虫のときの姿です。ハゴロモの仲間には他にもいくつか種があり、そのうち３種類について天覧山・多峯主山で写真を撮影していました。今回は、幼虫が分泌する蝋物質による特徴を持つ、ハゴロモの仲間をご紹介します。

ハゴロモは幼虫から成虫の期間を通して、１㎝前後の小さな昆虫です。カメムシのように木や草の汁を吸い、クズ、チャノキ、クワ、カシなどの多様な植物を好み、身近な草木の周辺で暮らしています。成虫は細い針のような口と離れた眼を持つセミのような顔つきで、身体に対して翅が大きくガのような姿です。

アオバハゴロモの成虫は、うす緑色で、飛んでいないときは２枚の翅をピッタリ閉じています。（写真 3）よく、一つの木の枝葉に集団で集まっているのを見かけることがあります。さらに、枝葉に白い綿のような蝋物質で覆われた部分があれば、幼虫が下に潜んでいるかもしれません。白い糸で身体全体を覆った幼虫は見つかりにくく、羽衣で身を隠しているかのようです。

それに対しベッコウハゴロモの成虫は、翅に２本の薄い筋模様があり、飛んでいないときは翅を水平に開いています。（写真 4）ベッコウハゴロモの幼虫は、アミガサハゴロモの幼虫とよく似た姿をしており、白い糸状の蝋物質からなる毛束を、腹部から放射状に広げています。この束は閉じたり開くことができ、刺激を受けると毛束をすぼめ小さな体で 30cm ほども跳ね上がります。広げた毛束がパラシュートのように風を受け止め、移動や着地に役立っています。

蝋物質によるユニークな生態を持つハゴロモの仲間。成虫は秋まで見られます。見つけたときは、ぜひ観察してみてはいかがでしょうか。

（3）アオバハゴロモ
の幼虫が分泌する蝋物質（左）と成虫（右）

（4）ベッコウハゴロモの成虫